

令和7年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【土合小学校】

⑥	次年度への課題と学力向上策
知識・技能	国語「言葉の特徴や使い方にに関する事項」の「主語と述語の関係」を課題として、主語・述語それぞれの意味や双方がベアになることで意味をもつ言葉になるといった基礎を言語活動を通して理解できるように単元計画を設定していきたい。算数では、全学年に共通する課題として「数と計算」における小数の減法や除法といった四則計算の技能の定着があげられるので、反復・習熟に取り組み時間を十分に確保して技能定着を図りたい。
思考・判断・表現	国語「書くこと」では、3年生では敬体と常体の使い分けに課題がみられたが、4～6年生においては「自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫する」ところに課題がみられた。そこで、書く単元の指導事項を中心に「自分の考えを明確にすること・自分の考えの根拠を明確にすること」に重点を置いた指導を設定していきたい。算数「データの活用」では、全体的にはグラフが示している特徴を読み取る力に課題がみられたので、今年度から継続して複数のグラフの特徴を捉え、効果的に活用する学習活動の充実を図りたい。

①	今年度の課題と学力向上策	
	学習上・指導上の課題	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	<学習上の課題> 算数「変化と関係」 <指導上の課題> 学年が上がるにつれ理解の定着率が低下している。習得した内容を活用させることで理解を確実にしていく必要がある。	⇒ 該当領域の学習時期に、授業の始めに前時の学習を振り返ったのちに本時の課題へつなげることで、既習内容の定着化及び既習内容を活用した学習へと関連付けられる。【毎時間】書き込み式ドリルやドリルパーク(ICT)、習熟度に合わせたプリント等を活用した学習機会を確保することで、個々の課題に合った学習ができるよう指導する。【週に1度】
思考・判断・表現	<学習上の課題> 国語「書くこと」算数「データの活用」 <指導上の課題> 国語では昨年度より課題として重点指導をしている。向上はみられているので、継続的な指導が必要である。算数はグラフの活用に課題がみられる。複数のグラフの特徴を捉え、効果的に活用する学習活動の充実が必要である。	⇒ 国語では、書く活動に取り組む際、評価の観点ワークシートとして配付若しくは、データ上で閲覧可能にすることで常時確認できるようにするとともに、共同編集等を活用した協働的な学びの時間を設定する。【書く単元の際(毎回)】算数では、書き込み式ドリルやドリルパーク(ICT)、習熟度に合わせたプリント等を活用した学習機会を確保することで、個々の課題に合った学習ができるよう指導する。【週に1度】

⑤	評価(※)	調査結果 学力向上策の実施状況
知識・技能	B	年度当初より実施してきた本学力向上策は、学校全体に定着させることができた。また、ドリルやドリルパーク(ICT)、プリント等を活用した学習習慣も定着しており、教師からの声かけ等がなくても休み時間や自習時間を利用して主体的に学習する児童が2学期よりも増加した。
思考・判断・表現	B	年度当初より実施してきた本学力向上策は、多くの教科・領域でも評価の観点を示した授業が定着してきた。また、児童も評価の観点を意識しながら学習に臨む習慣が定着してきた。ドリルやドリルパーク(ICT)、プリント等を活用した学習習慣は、先述の通り2学期よりも増加した。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	国語では、「(3) 我が国の言語文化に関する事項」の時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気付く問題において課題がみられた。選択肢が表現している文の意味を正しく読み解いていないため、出てきた言葉・単語のみに注目するのではなく、それが文となったときに何を表現しているのかを読み解く力の育成が必要である。算数では、「A 数と計算」の数直線の1目盛りに着目して分数で表す問題において課題がみられた。誤った分母で解答していたため、数直線の1目盛りが整数の1を何等分しているのかを捉える力の育成が必要である。
思考・判断・表現	国語では、「C 読むこと」の目的に応じて文章と図表を結び付け、必要な情報を見付ける問題において課題がみられた。話合いの内容を正しく読み解かず、出てきた言葉・単語に注目して解答していると考えられるので、ひとつのまとまり(例:場面、段落、吹き出し)が何を表現しているのかを読み解く力の育成が必要である。算数では、「A 数と計算」の分数の加法について、共通する単位分数の幾つ分かを数や言葉を用いて記述する問題において課題がみられた。共通する単位分数が何になるかという通分について記述するのみになっており、単位分数の幾つ分かに慣れていないという誤答が多かった。問題文が何を求めているかを正確に捉える力の育成が必要である。

①結果分析(管理職・学年主任等)

②詳細分析(学年・教科担当)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	今年度の課題としていた算数「変化と関係」では、学年によって市平均を下回った設問もあったが、全体では市平均を上回る結果となった。全学年に共通する新たな課題として、国語「言葉の特徴や使い方にに関する事項」の主語と述語の関係が正しく理解できていないことが判明した。算数では、3・4年生において「図形」の定義や特徴の理解に課題がみられた。また、全学年に共通する課題として「数と計算」における小数の減法や除法といった四則計算の技能の定着があげられる。
思考・判断・表現	今年度の課題としていた国語「書くこと」では、3年生では敬体と常体の使い分けに課題がみられたが、4～6年生においては「自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫する」ところに課題がみられた。算数「データの活用」では、4年生が市平均を上回る結果となったが、全体的にはグラフが示している特徴を読み取る力に課題がみられた。

③	中間期報告	
	評価(※)	学力向上策の実施状況
知識・技能	B	授業開始時における前時の振り返りにより、既習内容の定着化及び既習内容を活用した学習への移行は学校全体に定着してきている。また、ドリルやドリルパーク(ICT)、プリント等を活用した学習習慣も定着してきており、休み時間や自習時間、放課後の家庭での時間を利用して主体的に学習する児童が増加した。
思考・判断・表現	B	評価の観点を、「児童がいつでも確認可能にすることが常態化されてきて、学力向上策に向けた国語「書くこと」だけでなく多くの教科・領域でも評価の観点を示した授業が増加した。また、児童も評価の観点を意識しながら学習に臨むようになった。ドリルやドリルパーク(ICT)、プリント等を活用した学習習慣は、知識・技能でも記述したとおり主体的に学習する児童が増加した。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)